

木幡

世阿弥作

ワキ 伏見某の家臣

女 左衛門の妻

シテ 木幡左衛門

ツレ女 乳母

母 妻の母

地は

山城

季は

九月

「かやうに候ふ者は。伏見の里に住居する者にて候。

さても頼み奉り候ふ人は。はや年たけ給ひたる御事にて候。又息女の候ふは。あたり近き木幡の左衛門殿と申す御方に御座候。いつもかの御方より御音信の候。今日は我々文を持つて木幡へ参り候。如何に案内申し候。伏見より御使に参りたるよし。それく御申し候へ。

女詞「伏見よりと申すか。人までもなしこなたへ来り候

へ。

「殿の御留守にてありげに候。あら嬉しや候。如何に申し候。伏見より御文にて候ふ是御覧候へ。

女「あら嬉しや文と申すか。まづく見うするにて候。サシ「げにや世の中に。住まば心に任せても。立ち添ひ頼む柞の森の。頼む木陰に有るべきに。処々の住居とて。そはねば親子の契りとても。

下歌地「薄き衣のひとへにて。伏見の里の竹の庵。夜寒知

られて痛はしや。

上歌

「羊の歩み隙の駒。／＼。行くや月日も重なりて。

秋も名残か長月の。夕べの空や村時雨。雲となり
雨となる。木の葉の風の音までも。心細さの夕べ
かな。／＼。

シテ詞
「是は木幡の左衛門何がしにて候。今朝とくより罷
り出で候ひて。事の外給べ醉ひ。只今我宿に帰り
候。其文は何くよりの文にて候ふぞ。

女
「いやこれはたゞ。

シテ
「いや給はり候へ。見参らせ候ふべし。

女カール
「女心のはかなさは。恥かしとのみ思ふばかりに。
口の内にぞ隠しける。

シテ詞
「さればこそ始めより。不審なりつる男文。見せて
は何と業平の。鬼一口に飲みたる文。今は疑ふ処
もなしと。

地
「男は腹の立つまゝに。／＼。又は一つは醉狂の。刀

を抜きて刺し殺し。身はいたづらになしにけり。
く。

ツレ女「あら悲しや。唯今の文を御不審あり殺し参らせられ候ふと申すか。先づく帰つて母御に此由申さうするにて候。

母「いかに乳母。さていつの事と申すぞ。

ツレ女「只今の事にて御入り候。

母「さて其故は如何に。

女「さん候是より参り候ふ御文を。痴者文と思し召して。

母「さも荒けなき人心。

二人「木幡の里の口なしの。言はぬは道理情なや。苦しや木幡山。嶮しき道に馬はなし。徒步はだしてて来ぬれども。最期を見ぬぞ悲しき。

シテ詞「如何に申し候。かやうの事は親も子も知らぬ事にて候。はやく御帰り候へ。

「仰はさる御事にて候へども。かやうになり給ひて
も。無き名を取り給はん事。世上の聞えも見苦し
く候へば。浅ましながら母御より参らせられ候ふ
文を。取り出だし御覧候へかし。

シテ
「さては未だ御不審候ふか。是は又安き御事なりと。
男は再び刀を抜き。母御の嘆かせ給ふなる。心を
知れば安方の。

地
「鳥も音を鳴く血の涙。紅に染める此文を。取り出

だし見れば浅ましや。目もあてられぬ有様。く。
「さらば是にて高く読み候ふべし。それにてよく聞
し召し候へ。其後は久しく文にても申さず候。御
ゆかしく思ひ参らせ候。又秋も末になり候へば。
深草山の紅葉もやうくなるべし。思召し立ちて
御覧候へ。又御恥かしき申事ながら。早秋深き夜
嵐の。

母
「なふく暫く。あたりに人もや聞き候はん。さの

み高くな読み給ひそ。

二人 「はや秋深き夜嵐の。さらでも寒き老の寐覚の。薄

小袖一つ給び給へ。かまへてく此文を。殿には隠

させ給ふべし。もしも落ち散る事もやありなん。

あだにも置かで此文を。煙となさせ給ふべし。

地 「文は残るに主は今。煙とならん其跡に。留まらん

思ひの。母が嘆きを如何にせん。

クセ 「げにや嘆きても。返らぬ水のあはれ世に。澄みて

濁らぬ人心。愚なるかなたちねの。中にゆきか
ふ其文を。恥かしとのみ思草の。忍ぶ氣色を生憎
に。猶夕顔の露の身の。消えて帰らぬ面影を。見
るこそはかなかりけれ。

シテ 「今はかひなき妻琴の。同じ道にと思ひ切り。腰の
刀に手を掛くれば。こは如何に浅ましやと。母や
乳母は取り付きて。我に思ひを筑波嶺の。このも
かのもに別れなば。ながらふべきか情なやと。留

め給へば力なく。理りや面白なや。何となるべき身の果。是を出離の便りにて。く。様かへ妻の亡き跡を。母諸共にとふ法の。蓮も同じ二世の縁。尽きぬ契となりにけり。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈第六輯」大和田建樹著